

過去とその取り扱いの探究能力を育成する歴史教育の導入単元 — ドイツの事例から —

An Introduction Unit in History Education for the Development of Historical Competence:
A Case from Germany

服部 一 秀*
HATTORI Kazuhide

要約：本稿では、中学校の歴史教育において過去とその取り扱いの探究能力を育成するための導入単元の在り方を探ることを目的とし、ドイツにおける具体的事例「日常文化の一部としての歴史」について分析している。過去についての探究能力とともに社会における過去の取り扱いについての探究能力を育成することをめざし、年代史的構成において個々の単元ごとに史資料の解釈に基づく叙述の作成と分析検討の学習に取り組みせる場合、各単元でのそのような学習を準備し、過去とその取り扱いの探究能力の育成を始動させるため、導入単元はそれらの探究能力の基盤となる見方や態度を学習者自身が身近な題材や具体的な素材に取り組み萌芽的な探究活動を通して学びとれるようにするものとなることを明らかにしている。

キーワード：歴史教育，中学校，導入単元，社会における過去の取り扱いの探究，歴史コンピテンス

I はじめに

歴史教育における導入単元では、その歴史教育でめざす学習に向けて学習者に準備させることが重要であろう。尤も、いかなる学習をめざすかにより、その準備の内実は異なるはずである。「我が国の歴史の大きな流れ」の理解を最重要視する2008年版中学校学習指導要領の歴史的分野の場合、学習者が「時代の区分やその移り変わり」に気づくことが導入単元の中心となる。「我が国の歴史の大きな流れ」の理解に留まらない学習を歴史教育でめざすとすれば、現状とは異なった導入単元が求められることになる。たとえ時間順の年代史的な構成を維持するとしても、その実質を改めて新たな歴史教育を展開していくためには、新たな導入単元を要するといえよう。

そうであるならば、過去について探究する学習とともに、現在の社会における過去の取り扱いについて探究する学習をめざすとき、そのような歴史教育における導入単元はどのようなものである必要があるのだろうか。年代史的構成を基本としつつも、学習者が現在や未来のために過去について問うこと、そしてそのためにも現在における過去の取り扱いについて問うことをめざすとき、そうした学習に向けた導入単元では学習者が何をどのように学べるようにすることが重要なのだろうか。それは導入単元としてのいかなる役割に答える必要があるからであろうか。

本稿では、このような課題意識の下、学習者が過去とその取り扱いを探究する中学校歴史教育の新たな形成に向け、そのような探究の学習に向けた導入単元の在り方を具体的事例の分析を通して明らかにしたい¹⁾。そのためにドイツのザクセン・アンハルト州中等学校（第5～9・10学年）²⁾の

*教育実践創成講座

歴史科における導入単元の場合を取りあげることしよう。

ドイツでは近年、社会における過去の取り扱いの有り様が「歴史文化 (Geschichtskultur)」と呼ばれ (Pandel, 2006 : 74-75, 2012 : 161-177, 他), 歴史教育の内容に取り込まれはじめている³⁾。博物館の見学のように単なる「学習の場」としたり, 歴史コミックによる興味づけのように単なる「学習のきっかけ」としたりするだけでなく, 社会における過去の取り扱いを一種の叙述として「学習の対象」にする学習がすすめられつつある⁴⁾。

そのなかでも, ザクセン・アンハルト州中等学校の歴史科は, 年代史的構成における全ての単元で歴史文化について取りあげるという大きな特徴をもつ。この同州中等学校の歴史科のレアプランは, 2009年に試行版 (ST, 2009) が発表され, 2012年に公聴版に基づくパブリックコメント手続きを経て確定版 (ST, 2012) が発表された。試行版と確定版をくらべてみると, 試行版では導入単元「日常文化の一部としての歴史」が設けられていたが, 確定版では古代ギリシア史単元を付加するために授業時数上の理由でやむなくカットされている。とはいえ, 試行版と確定版でねらっている歴史教育は基本的には同じであり (LISA, 2012, 参照), その導入単元も確定版レアプランの歴史科でめざす学習の準備のために本来は設定することが望ましいものと考えられているといえる。

同州歴史科の確定版レアプランにおける目標とその達成のための基本方略については既に別稿 (服部, 2014) において考察している。そこで以下, その目標と基本方略については簡単に確認し, その上で試行版レアプランにおける導入単元「日常文化の一部としての歴史」に関して取りあげ, その目標や構成についてとらえるとともに, そのような導入単元の役割を同州歴史科でめざされている歴史教育との関連において検討したい。これらを通して, 中学校歴史教育において過去とその取り扱いの探究能力を育成するための導入単元の在り方を明らかにしよう。

II 歴史教育目標としての「歴史コンピテンス」とその育成の基本方略

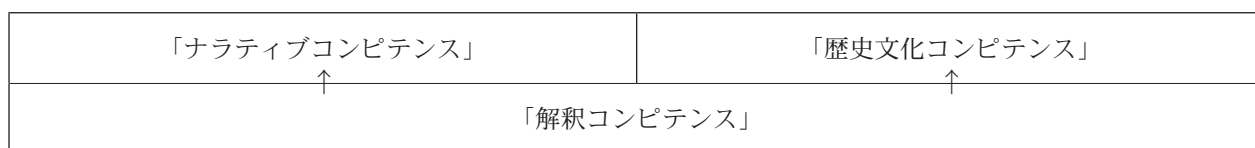
最初に, ザクセン・アンハルト州の中等学校における歴史科の目標とその達成の基本方略について簡単に確認しておこう⁵⁾。

1. 過去とその取り扱いを探究する「歴史コンピテンス」

まず, ザクセン・アンハルト州中等学校の歴史科が何をめざしているかを確認しておきたい。

歴史科のレアプランでは, 歴史科で学習者に育成するものが「歴史コンピテンス (Historische Kompetenz)」と呼ばれている。それは図1の通り, 「ナラティブコンピテンス (Narrative Kompetenz)」と「歴史文化コンピテンス (Geschichtskulturelle Kompetenz)」, 「解釈コンピテンス (Interpretationskompetenz)」という3つのコンピテンス領域からなるとされている (ST, 2012 : 4)。2009年の試行版レアプランでは「解釈コンピテンス」と並置されていた「種類コンピテンス (Gattungskompetenz)」が2012年の確定版レアプランでは「解釈コンピテンス」に組み込まれて一括されているが⁶⁾, 「歴史コンピテンス」として意図されているものに変わりはない。

図1 ザクセン・アンハルト州中等学校の歴史科における「歴史コンピテンス」モデル



(Kultusministerium des Landes Sachsen-Anhalt, *Fachlehrplan Sekundarschule, Geschichte*, 2012, S.4より一部改変, 服部一秀「年代史的カリキュラムにおいて過去の取り扱いの探究能力を育成する方略」, 『社会科教育研究』No.123, 2014, p. 14より再掲)

「ナラティブコンピテンス」とは、歴史上の様々な事柄を取りだして関係づけ意味を付与することで対象とする過去について考えられる能力である（ST, 2012: 6）。「歴史文化コンピテンス」とは、現在の社会とりわけ一般の人々のパブリックな領域における過去の取り扱いについて考えられる能力である（ST, 2012: 6）。また、「解釈コンピテンス」とは、様々な史資料をそのタイプに応じて適切に扱い解釈することができる能力である（ST, 2012: 5）。

この歴史科では、過去の人々の営みについて考えられること、現在の人々による過去をめぐる営みについて考えられることが「歴史コンピテンス」として重視されている。それは過去とその取り扱いについて探究する能力である。過去を扱う様々な事物が遍在する社会のなかで自らの歴史認識を築き歴史意識を成長させていくための両輪となる能力の育成がめざされている。

2. 年代史的構成下の各単元における史資料解釈に基づく叙述の作成・分析検討の関連的遂行学習

次に、「歴史コンピテンス」を育成するための基本方略について確認しておきたい。同州中等学校の歴史科は年代史的な全体構成をとり、単元レベルに相当する主題の全てで3つのコンピテンス領域の目標を設定し、図2のように、史資料の解釈と叙述の作成や分析検討を一定の歴史的題材のもとに結びつけて学習させようとしている。全体レベルと各単元レベルについて概略しよう。

ザクセン・アンハルト州の歴史科では内容的主題と方法的主題が設けられている。内容的主題はドイツ・ヨーロッパの政治史を中心に扱っており、それらは年代史的に配列されている。ドイツ・ヨーロッパ世界が形成されるまでの前近代史を扱う第5・6学年には、史料（実物史料）に関する方法的主題もおかれている。ドイツに近代国家が形成される19世紀までを扱う第7・8学年には、狭義の叙述に関する方法的主題もおかれている。また、東西が分断・再統合されるまでの20世紀を扱う第9・10学年には、広義の叙述に関する方法的主題もおかれている。とはいえ、全体の基幹となっているものは、内容的主題の系列である。この歴史科は年代史を基本としている。

年代史的な構成の下、個々の主題では、3つの全てのコンピテンス領域に関する目標が設定されている。例えば、第5・6学年の主題「中世国家の例としてのオットー帝国」（ST, 2012:13）の場合、「ナラティブコンピテンス」の目標として、オットーによる国家の強化を複数の関係者の立場から描写すること、「歴史文化コンピテンス」の目標として、現在の自州におけるオットー期の遺産の取り扱いについて議論すること、「解釈コンピテンス」の目標として、国家の強化にかかわるオットーの事績に関する史料を評価したり読みとったりすることなどが掲げられている。

レアプランの改訂作業の一環で同州の教育研究機関 LISA の主導によって幾つかの主題の計画例が作成されており、それらでは学習者が史資料の解釈に基づく叙述の作成と分析検討を通して過去とその取り扱いの探究に取り組むことが意図されている。主題「中世国家の例としてのオットー帝国」の計画例「オットー大帝は適切な宣伝手段か？」（LISA, 2011）の場合、この計画例は3つの学習パートからなっている。パート1では、州都マクデブルクの宣伝キャンペーンに関する資料の内容をとらえ、オットーという歴史人物の観光資源化に気づき、宣伝手段としての歴史人物の使用に関して議論してみる。パート2では、オットーの事績を史料・記述から読みとり、国家の強化という観点から整理し叙述をつくる。パート3では、オットーの事績について引き続き取りあげ、史料と

図2 ザクセン・アンハルト州歴史科の各単元レベルにおける学習の基本構造

叙述の作成の学習 （「ナラティブコンピテンス」のための学習）	叙述の分析検討の学習 （「歴史文化コンピテンス」のための学習）
史資料の解釈の学習 （「解釈コンピテンス」のための学習）	

（筆者作成）

記述に基づいてオットーの負の評価について吟味検討し再度叙述した上で、歴史人物の観光利用について議論し、宣伝用人物としてのオットーの使用について改めて分析検討する。オットーによる国家の強化という歴史的題材を取りあげ、史資料の検討や読みとりに基づき、オットーによる国家の強化についての叙述の作成とオットーの観光資源化による宣伝キャンペーンの分析検討を関連づけて行う学習により、各コンピテンス領域の目標をめざしている。

このように各主題では、史資料の解釈に基づく狭義の叙述の作成と広義の叙述の分析検討に取り組ませる。学習者が叙述としての歴史をうみだし、それにより、あるいは、そのために、社会のなかの様々な歴史を分析検討することを重んじる。叙述の構築的な作成による過去の探究と、叙述の脱構築的な分析検討による過去の取り扱いの探究を、一定の歴史的題材のもとに関連づけて学習者自身が遂行する学習により、3つのコンピテンス領域における目標をめざすわけである。

この歴史科では、個々の主題で史資料の解釈に基づく叙述の作成と叙述の分析検討の関連的遂行学習をねらい、年代史中心の全体構成に従って繰り返す。ドイツやヨーロッパの人々の社会的な記憶にかかわる題材を取りあげる年代史的な構成において、過去の探究と過去の取り扱いの探究に繰り返し取り組ませることにより、それらを相乗的に熟達化させていく。それによって過去とその取り扱いを探究する「歴史コンピテンス」の育成を一貫してすすめることが、この歴史科の基本方略となっている。

Ⅲ 「日常文化の一部としての歴史」の目標 －過去とその取り扱いの探究能力の基盤育成－

ザクセン・アンハルト州中等学校の歴史科は、ドイツ・ヨーロッパの政治史を中心とする年代史的構成をとる。そのなかで単元レベルに相当する個々の主題において、過去のとらえ方や過去とのかかわり方を考える上で重要な歴史的題材を取りあげ、史資料の解釈に基づく叙述の作成と分析検討を通して過去とその取り扱いの探究に取り組ませ、目標でめざす能力育成をすすめる。そのための導入として試行版レアプランで構想されていたものが「日常文化の一部としての歴史」(第5学年)である。試行版レアプランにより、その目標をとらえよう。

試行版レアプランに示されている「日常文化の一部としての歴史」の目標は、表1の通りである。

表1中の「解釈コンピテンス」と「種類コンピテンス」は、2012年の確定版レアプランでは「解釈コンピテンス」として一括されるものであり、史資料解釈の能力を指す。史資料解釈能力の育成

表1 「日常文化の一部としての歴史」の目標

コンピテンス領域	各コンピテンス領域に関する目標
解釈コンピテンス	相異なる史料種(例えば、文献史料、実物史料、音声史料、画像史料)の時間的に様々な史料より、人物や集団あるいは事物についての情報を取り出し、歴史的な言明を引き出す。
種類コンピテンス	同一の課題についての様々な史料種や様々な文献史料類の説明力を診断する。
ナラティブコンピテンス	ある出来事についての歴史的な情報を結びつけ、その際に、確認されること、推定されること、考えられることを意識して区別する。
歴史文化コンピテンス	生活環境のなかでの歴史文化との出会いを記録し評価する。
基本的知識	<ul style="list-style-type: none"> ・歴史文化：現在世代による過去の取り扱いの諸形態 ・史料種と文献史料類

(Kultusministerium des Landes Sachsen-Anhalt, *Lehrplan Sekundarschule, Geschichte, Erprobungsfassung*, Magdeburg, 2009, S.13)

に向け、「解釈コンピテンス」「種類コンピテンス」に関してめざされている目標は、様々なタイプの史料から情報を読みとったり、同じ題材についての様々なタイプの史料の説明力を診断したりし、史料の重要性や史料批判の不可欠性に気づくことである。そのために史料の様々なタイプについての知識理解も意図されている。

過去を探究する「ナラティブコンピテンス」に関する目標は、ある題材についての歴史的情報を結びつけ、確証のある部分とそうでない部分を意識的に区別して述べることである。

現在の社会における過去の取り扱いを探究する「歴史文化コンピテンス」に関する目標は、日常生活のなかに過去の取り扱いに関する事物を見出すこと、それを鵜呑みにせず一度評価づけてみることであり、現在の社会における過去の取り扱いの諸形態に関する知識理解もめざされている。

このように導入に位置づく主題においても、全てのコンピテンス領域に関する目標が設けられている。それぞれの目標のなかでは取り扱う題材について具体的に触れられておらず、特定の歴史的題材に関わる知識や能力がめざされているわけではないし、年代史的構成で扱う歴史的内容そのものへの興味を喚起することがねらわれているわけでもない。過去の取り扱いの探究能力に関する目標として、身のまわりに広義の叙述としての歴史の存在やその多様さを発見したり、その存在を鵜呑みにせず評価づけてみるのが重視されているように、個々の能力のための目標では各々の基盤となる基本的な見方や批判的な方法的態度を育むことがねらわれている。

年代史的構成の枠外において、過去とその取り扱いを探究できる「歴史コンピテンス」の基盤を育成することが、この「日常文化の一部としての歴史」の目標である。

IV 「日常文化の一部としての歴史」の構成 －身近な題材や具体的な素材に基づく萌芽的探究活動－

「歴史コンピテンス」の基盤育成をねらう「日常文化の一部としての歴史」の学習はどのようなものになるのか。この主題についてはLISAによって計画例がつけられていないので、同州の中等学校歴史科レプラン委員会のメンバーが作成に参加している歴史教科書『過去への旅－ザクセン・アンハルト州版 第5・6学年用』⁷⁾の「日常文化の一部としての歴史」(Ebeling/Birkenfeld u.a., 2010a : 8-19)に着目してみよう。

この歴史教科書の「日常文化の一部としての歴史」は、5つの節からなる。各節は、テキスト部、学習資料等、そして、学習課題からなる。それらを一覧表にまとめ、基本構成を筆者が整理したものが、次頁の表2である。なお、表2には、同教科書のワークブックに示されている各節用の課題 (Ebeling/Birkenfeld u.a., 2010b : 1-4) も参考までに並記している。

第1節「歴史と時間－時間を区切って表す」では、テキスト部で先史～近現代の時代と年代の表し方や年表の形式について解説した上で、自分自身の歴史に着目させる。そうして、学習課題によって、自分自身の個人年表を企画・作成するように学習者に求める。この最初の節においては、時間的把握の方法を含め、大凡の時間軸を掴ませるとともに、それに従って初歩的な個人年表づくりという活動に取り組みせることで時間的な変化を身近なレベルで意識させる。歴史的考察をすすめていくための大前提となる時間や変化の基本的意識を育もうとしている。

第2節「歴史においての手がかり－過去を証言するもの」では、テキスト部において、過去と史料と歴史記述の関係、史料のタイプについて解説する。掲載されているいろいろな過去の痕跡に即して、歴史的考察にとっての史料の重要性や史料批判の不可欠性を考えること、様々な具体的史料を分類すること、自分の身のまわりの何が将来において史料とされうるかを考えることを学習課題で求める。第3節「史料種－騎士」では、中世騎士の通俗的なイメージに疑問を呈する文章、英雄

過去とその取り扱いの探究能力を育成する歴史教育の導入単元

表2 『過去への旅ーザクセン・アンハルト州版 第5・6学年用』における「日常文化の一部としての歴史」の構成

節	テキスト部 (リード文/項目)	学習資料等	学習課題	ワークブックの課題	基本構成
1. 歴史と時間ー時間を区切って表す	歴史という教科で君は、人々がかつてどのように生活し行動したか、そのことで今日の生活にどんな影響があるかに取り組む。君は日々、歴史に出会う。人類の歴史はおよそ300万年前にはじまっている。 ◆時代 ◆年表 ◆君の歴史	[資1]時代区分(図) [情報]時代(解説) [資2]時間の区分(図) [資3]年表のための材料(図)	①君の個人年表を企画しなさい。 a. 例えば壁新聞やファイルなど、適切な形態を選びなさい。 b. 君の誕生、君の成長、幼稚園の入園、入学、スポーツクラブへの入会などを想起しなさい。資3が参考になります。 c. 年表を同じ間隔で時間区分しなさい。 d. 各区分線の下に年数を記し、一番左は君が開始年にしようとしている年にしなさい。 ②君の個人年表を写真・郵便葉書・挿絵などで構成しなさい。	[私の歴史] これは君の特別なページです。君の人生の情で埋めなさい。(私の子ども時代/私のデータ/私は此処で暮らしている/私の人生のクライマックス/私の親/私の学校/私のお気に入りの教科/私が余暇にしたいこと) [歴史と時間] 1945年以降の年の時系列図がここに示されています。他の出来事(政治、生活、居住地など)とそれらの絵を見つけてください。	時代と年代の表し方について理解、自分自身の個人年表を企画・作成
2. 歴史においての過去を証言するもの	過去は多様な痕跡を残している。装身具、手紙、集落の基礎、墓、文書は、過去の事柄について私たちに伝える。歴史から伝わるそれらのものは、史料と呼ばれる。それらは、人々の生活がかつてどのようにであったかについての私たちの知識の基盤である。過去のこの観念が「歴史」である。歴史家は過去についての確かな認識を得ようとする。そのために歴史家は史料を集め、活用する。史料には様々な種類が存在する。 ◆文献史料 ◆画像史料 ◆実物史料	[資1]ローマの硬貨(写真) [情報]パピルス(解説) [資2]手斧ー石器時代の道具(写真) [資3]中世の文書(1361年)(写真) [資4]私の祖父母(写真) [資5]ベルリンのブランデンブルク門(写真) [資6]壺絵(写真)	①史料のいろいろな種類を挙げなさい。 ②歴史の探究にとっての史料の意味を説明しなさい。 ③史料を批判的に精査することが必要である理由を説明しなさい。 ④最初の2頁のイラスト[歴史トラंक]を史料のさまざまな種類に分類しなさい。 ⑤将来の歴史家が興味を持ちうるさまざまな史料を見つけなさい。それらはどんな情報を提供しますか。 ⑥君たちのクラスの歴史トラंकを自分で作成しなさい。	[歴史史料] 君の家族の歴史について知りたいときにどうするかを説明しなさい。 過去はいろいろな方法で伝えられます。歴史学者は歴史史料のさまざまな種類を区別しています。史料をいくつかのグループに分類しなさい。それぞれのグループに適切な標題をつけなさい。 馬車、日記、伝説、文書、説話、家具、契約、図面、墓石、遺骸、回想録、廃墟、貨幣、洞窟壁画、碑文、神話、手紙、槍、法、新聞、写真、遺言書、制服、インタビュー、地図、衣装、拳銃、録音、船の残骸、容器	過去の様々な痕跡に即して、史料の意味や史料批判の不可欠性、史料のタイプや多種多様なものが史料となりうる可能性を把握
3. 史料種一騎士	中世において、騎士は、特有な生活形態や文化をもった独自の身分であった。その生活形態や文化は特に、誠実・勇気・キリスト教的な生活態度といった騎士の美德の形成、宮廷のミネザング、また馬上試合や私闘に出したものである。 強い馬にのって馬上試合をしたり、火をはく竜とたたかったり、攻め込まれた城主息女を助けに急いだり、さらに冒険をやったのけたりという重い甲冑を着た騎士のイメージが広がっている。だが、書かれた物、絵、考古学的史料は、これらの空想的な話が中世の現実とほんの僅かな部分でしか一致しないだろうと思わせる。 ◆リチャード1世(獅子心王)	[資1] 剣と盾をもった騎士が棺の上にすわり、両足で獅子をふんでいる(1531年のニーダーザクセンのターレル貨)(写真) [文1] 童謡で騎士クーニベルトが取りあげられている(歌詞) [資2] 騎士、死、悪魔(デューラーの銅版画、1513年)(絵) [資3] リチャード1世(1157~1199年)(1270年の細密画)(絵) [資4] ロンドンのリチャード獅子心王の記念碑(写真) [文2] リチャード獅子心王がウィーンで捕らえられた様子を伝説が伝えている(文章)	①この2頁上にあるさまざまな史料の種類を挙げなさい。 ②史料から騎士の生活についてわかることを説明しなさい。 ③文2の伝説を自分の言葉で語り直しなさい。 ④いろいろな史料を説明力に関して査定しなさい。 ⑤いろいろな史料を利用し、騎士という主題について児童向け事典用の短い記事をまとめなさい。		中世騎士の通俗的なイメージおよびリチャード1世に関する史料の情報の読みとりと説明力の査定

過去とその取り扱いの探究能力を育成する歴史教育の導入単元

<p>4. 3世代が想起する-1948年・1973年・1996年の入学</p>	<p>全ての子どもにとって、入学とともに人生の新たな大きな一時期がはじまる。一日の進行が変わり、新たな人たちと知り合いになり、未知の課題に立ち向かう。さまざまな世代においての入学の経験がどのように相異なっているかを以下の史料が示す。</p>	<p>[資1] エリカ・ロルツ、カトリン・シュライアー、フランチスカ・シュライアー (2009年の写真) (写真) [資2] 筆記用薄板 (写真) [文1] エリカ・ロルツ(1942年生まれ)はズデーテン地方からの移住児童としての1948年の通学1日目を想起する (文章) [資3] 1973年-カトリン・シュライアーの入学 (写真) [文2] カトリン・シュライアー(1966年生まれ)の記憶から (文章) [資4] 1996年-フランチスカ・シュライアーの入学 (写真) [文3] フランチスカ・シュライアー(1990年生まれ)の学校時代はお試し日でもってはじめた (文章)</p>	<p>①文1～3を入念に読み、知らない概念を明らかにしなさい。 ②3人の女性が想起していることを自分の言葉で語り直しなさい。 ③1948年の入学の写真がない理由を明らかにしなさい。 ④3人の女性の記憶が異なっている領域を検討しなさい。 ⑤君の通学1日目についての痕跡をさがしに行きなさい。記憶、発見物、親・祖父母との会話を利用しなさい。そうして君の通学1日目の歴史を記しなさい。</p>		<p>3世代の女性の入学について史料を集めて他世代の場合と対比しつつ叙述</p>	<p>「ナラティブコンピテンス」のための基盤育成</p>
<p>5. 歴史の文化-日常の中の歴史</p>	<p>◆歴史の知識とその利用 ◆歴史と歴史文化</p>	<p>[資1] 児童向け歴史図書の表紙写真 (写真) [資2] 児童・成人向けのゲーム (写真) [資3] クヴェードリンブルクにおける行列のなかの歴史人物 (写真) [記1] 歴史とツーリズムの関係について (文章) [資4] 映画「ヴィッキーと強い男たち」のポスター (写真) [資5] ハルツ郡ブランケンシュタイン城の廃墟 (写真)</p>	<p>①資1～4の具体的な歴史的背景を調べなさい。 ②学校のある場所や住んでいる場所における歴史文化の例を最低5つ言いなさい。 ③記1を用いて、歴史とツーリズムの関係を説明しなさい。 ④今週のテレビ番組を調べ、歴史に関係がある放送を全て集めなさい。君の年齢層用の放送にしるしを付けなさい。 ⑤児童向けの事典用に歴史文化という主題についての短文を記しなさい。 ⑥レーゲンシュタインのような古い城の廃墟を保存することは有意義か否か、クラスで討論しなさい。</p>	<p>[歴史文化-ロビン・フッド] ロビン・フッドの形姿は、歴史的な人物として多様に解釈されています。以下にはその例が挙がっています。そこではどの形態で過去が表されていますか。個々の画像に記しなさい。 謝肉祭の衣装、歴史画、ディズニー漫画、展示会、挿絵、映画、プレイモービルのフィギュア、インターネットのウェブサイトを、歌劇</p>	<p>歴史文化という観点で日常の世界を観察、過去の取り扱いの様々な存在や形態を発見</p>	<p>「歴史文化コンピテンス」のための基盤育成</p>

(Ebeling, Hans / Birkenfeld, Wolfgang u.a., *Die Reise in die Vergangenheit: Sachsen-Anhalt Band 5/6*, Westermann, 2010a, S.8-19, *Die Reise in die Vergangenheit: Sachsen-Anhalt Band 5/6 Schülerarbeitsheft*, Westermann, 2010b, S.1-4 より作成。なお、基本構成の欄は筆者による解釈を表す。)

視されたりチャード1世の相異なる評価を表す文章とともに、いろいろな史料を示す。学習課題により、それらの史料の種類を特定すること、史料から情報を読みとることや各史料の説明力を査定することで情報を吟味すること、それに基づいて騎士についての簡単な説明文を作成することを求める。第2節において、様々な具体的な史料に即して、史料の重要性や史料批判の不可欠性、史料のタイプや多種多様なものが史料となりうる可能性を掴ませ、その上で第3節において、それらの見方や史料への対し方に基づいて騎士に関する史料に取り組みさせ、史料の評価づけや情報の読みとりにあたらせることで身につけさせる。様々な時代やタイプや内容の過去の痕跡に触れさせ、それを通して史料として意味づけたり分類したり査定したり読みとったりする史料解釈の初歩に取り組みさせ、史料に関する基本的な見方や方法的態度を身につけさせようとしている。

第4節「3世代が想起する-1948年・1973年・1996年の入学」では、1990年生まれの女性とその母・祖母のそれぞれの入学に関する証言や写真を提示し、学習課題に取り組みさせる。学習者がそれらを史料として解釈し、3世代の女性の入学について説明づけたり比べたりすること、自らの入

学についての史料を集め、3世代の場合と対比しつつ情報を結びつけてまとめることを学習課題により指示している。その際には自分で集めた何に依拠しているかによって確証の有無を意識して記述させることになろう。入学という身近な題材をテーマにし、いろいろなものを史料にして再構成し表現してみるという入門的な叙述活動を通して、史料に基づき現在に構成される歴史の性格を確かめさせたり、妥当さを自問・意識しつつ情報を結びつけてまとめる思考スタイルを試みさせたりし、過去について探究するための基本的な見方や方法的態度を育もうとしている。

第5節「歴史の文化ー日常の中の歴史」では、社会の中での過去の取り扱いについて解説するとともに、歴史文化にかかわる身近な事物の事例を紹介し、学習課題に取り組ませる。課題で指示していることは、各事例が過去の何を扱っているかを調べることで、さらに自らの日常の中に歴史文化事物の事例を見出すこと、州内にある廃城の保存をめぐる議論に触れてみることなどである。歴史文化という観点で身のまわりの世界の観察に取り組み、史料や記述との違いや関係を意識しつつ様々な形態をとらえ、現状を絶対化せず相対化することを求めている。過去を扱う身近な事物を取りあげ、日常世界における過去の取り扱いの存在に気づくという分析検討の前提となる活動を通して、過去の取り扱いについて探究するための基本的な見方や方法的態度を育もうとしている。

この「日常文化の一部としての歴史」の基本構造は、図3のようにまとめることができる。はじめに第1節で、個人年表づくりなどに取り組ませ、時間や変化の意識という歴史的考察のための基盤を育む。その上で、第2・3節で、過去の具体的な痕跡に触れさせ、史料として取り組ませることにより、史資料を扱うための基盤を育む。そして、第4節で自分の入学についてまとめさせたり、第5節で過去を扱う身のまわりの様々な事物を発見させたりし、過去やその取り扱いを探究するための基盤を育む。「歴史コンピテンス」全体の基盤育成から、「解釈コンピテンス」の基盤育成、さらに「ナラティブコンピテンス」の基盤育成や「歴史文化コンピテンス」の基盤育成へとすすめる。5つの節は一つの共通した題材を取りあげるわけではなく、内容的に強いまとまりをもっているとはいえない。けれども、身近な題材や具体的な素材を取りあげること、第5節で叙述の分析検討の前提となる存在の発見に日常世界レベルで取り組ませるように、史資料の解釈あるいは叙述の作成や分析検討に向けた萌芽的な探究活動を行わせること、それらによって「歴史コンピテンス」の全体や各部分領域の基盤となるものを身につけさせようとすることでは一貫している。身近な題材や具体的な素材を取りあげ、萌芽的な探究活動に順次取り組ませることにより、過去とその取り扱いの探究のための基盤となる意識また見方や方法的態度を学習者に学びとらせ、最初の主題の目標に応えようとしている。

図3 歴史教科書『過去への旅』における「日常文化の一部としての歴史」の基本構造

[第4節] 自分の入学について再構成する活動等 (「ナラティブコンピテンス」のための基盤育成)	[第5節] 日常世界に過去の取り扱いを発見する活動等 (「歴史文化コンピテンス」のための基盤育成)
[第2・3節] 過去の具体的な痕跡に触れ史料として扱う活動等 (「解釈コンピテンス」のための基盤育成)	
[第1節] 自分の個人年表をつくる活動等 (「歴史コンピテンス」全体のための基盤育成)	

(筆者作成)

V 「日常文化の一部としての歴史」の役割 －史資料解釈に基づく叙述の作成・分析検討の遂行準備－

そのような「日常文化の一部としての歴史」の目標と構成の理由を、この歴史科における導入単元の役割から探ってみよう。

ザクセン・アンハルト州中等学校の歴史科では、学習者が社会の中で自らの歴史認識を築き歴史意識を成長させていけるように導くため、前掲の図1の通り、過去とその取り扱いを探究できる能力を「歴史コンピテンス」ととらえ、その育成をねらう。そのために、ドイツ史・ヨーロッパ史中心の年代史的構成における全ての主題において、図2のように、3つのコンピテンス領域にかかわる史資料の解釈、叙述の作成、叙述の分析検討の各学習を一貫して組み込み、一定の歴史的題材のもとに結びつける。ドイツ史・ヨーロッパ史上の題材を扱う個々の主題で史資料の解釈に基づく叙述の作成と叙述の分析検討の関連的遂行学習に取り組めるようにするとともに、それらを全体の年代史的構成に従って繰り返させることで過去の探究と過去の取り扱いの探究とを相乗的に高めさせ、「歴史コンピテンス」の育成をすすめていく。

そのための導入が「日常文化の一部としての歴史」である。それは、図3の通り、「歴史コンピテンス」全体の基盤となる時間や変化の意識の育成により、以後の歴史学習を準備するが、それだけに留まらない。学習者が個々の単元レベルで史資料の解釈に基づく叙述の作成と分析検討に取り組む態勢にスムーズに入れるようにするため、各コンピテンス領域の基盤となるものを育むことをめざす。身近な題材や具体的な素材を取りあげ、史資料解釈また叙述の作成や分析検討のそれぞれに向けた萌芽的な探究活動に順次取り組ませ、基盤となる基本的な見方や方法的態度を育んでいく。各主題で取り組んでいくことになる思考のイメージももてるようにしている。

このような「日常文化の一部としての歴史」の主要な役割は、過去とその取り扱いを探究する「歴史コンピテンス」の育成に向け、各単元レベルにおける史資料の解釈に基づく叙述の作成と分析検討という3つのコンピテンス領域にかかわる学習を準備することである。「歴史コンピテンス」の育成を始動させる起点として、その全体や各部分領域の基盤となる意識また見方や態度を育み、学習者が史資料の解釈に基づく叙述の作成と分析検討の遂行に備えられるようにするために構想されたのが、この「日常文化の一部としての歴史」であったわけである。それ故、ザクセン・アンハルト州歴史科の2012年確定版レアプランにおいても「日常文化の一部としての歴史」はおかれるべきであったろう。2012年確定版レアプランは「歴史コンピテンス」育成の基本方略では2009年試行版レアプランと共通しているけれども、知識の教育を重視する歴史教育観に対して一部妥協し、授業時数上の理由から「日常文化の一部としての歴史」をカットしており、それは「歴史コンピテンス」の育成にとってはマイナス効果をもたらすのではなかろうか。

VI おわりに

中学校歴史教育において年代史的構成を維持するとしても、実質において過去を探究する能力とともに社会における過去の取り扱いを探究する能力を育成しようとするとき、導入単元の設定に求められることは何か。以上の考察に基づけば、それは次の3点にまとめられよう。

第1は、導入単元の役割についてであり、過去とその取り扱いの探究という歴史実践の遂行能力の育成に向け、史資料の解釈に基づく叙述の作成と分析検討の遂行学習を準備するものとして、導入単元を位置づけることである。中学校の歴史教育において一定の知識を習得させることだけでなく、過去の探究能力とともに過去の取り扱いの探究能力を育成することをめざすのであれば、単に

時代の区分や時間的な変化に気づかせること、歴史的 content そのものへの興味を喚起することに導入単元の役割を留めず、そのような探究能力育成の起点としての役割を重視しなければならない。

第2は、導入単元の目標についてであり、過去とその取り扱いを探究する能力全体の基盤となる時間や変化の意識の育成に加え、過去を探究する能力や過去の取り扱いを探究する能力といった個々の能力の基盤となる見方や方法的態度の育成もめざすことである。過去を探究する能力と過去の取り扱いを探究する能力の両方の育成をめざし、それらの能力育成を継起的に行うのではなく、個々の単元において史資料の解釈に基づく叙述の作成と分析検討の学習によって並行関連的にすすめていこうとするならば、それらの何れの能力の基盤も各単元での学習の前提として導入単元で育み、以後の学習を準備する必要がある。

第3は、導入単元の構成についてであり、身近な題材や具体的な素材を取りあげ、萌芽的な探究活動を通して、過去とその取り扱いを探究するための基盤となるものを学習者が学びとれるようにすることである。時間や変化の意識のための萌芽的探究活動だけでなく、さらには、史資料の解釈、狭義の叙述の作成、広義の叙述の分析検討に向けた萌芽的探究活動に取り組みせ、まずは身近な題材や具体的な素材に即して学習者自身が実践的に学びとれるようにすることが重要である。

新しい歴史教育には新しい導入単元が求められる。中学校の歴史教育において、現在の社会とりわけパブリックな領域における過去の取り扱いを探究する能力の育成まで射程をひろげるためには、歴史教育を通してめざす学習を変えるだけでなく、導入単元もつくりかえなければならない。その新たな導入単元の役割と目標や構成について外国の先進事例から析出したのが本稿であり、この成果を新たな中学校歴史教育のための導入単元の開発において検証することが必要であろう。

註

- 1) 高等学校における歴史教育の導入単元については、角田・片上 (2004)、森他 (2007)、山名他 (2009)、宮本 (2012) など、いくつかの先行研究がある。本稿では、過去とその取り扱いの探究能力を育成する中学校歴史教育のための導入単元について考察することにより、新たな中学校歴史教育の可能性を探るとともに、中学校歴史教育における導入単元の研究にも寄与したい。
- 2) ザクセン・アンハルト州の中等学校 (Sekundarschule) は第5学年からはじまる。この中等学校は、大学進学に向けた中等一貫校のギムナジウム (第5～12学年) と違い、第5学年から第9学年までの基幹学校課程と第10学年までの実科学校課程を有する前期中等教育学校である。
- 3) 歴史学の文献は勿論のこと、歴史ドラマ、歴史映画、歴史小説、歴史コミック、歴史祭り、歴史ツーリズム、歴史展示、記念碑、記念日、記念行事、記念演説、歴史認識論争など、社会における過去の様々な取り扱いが歴史文化の範疇においてとらえられる。
歴史文化という概念がドイツ諸州の歴史科の学習指導要領において登場するのは大凡、2000年代以降である。近年では前期中等歴史科と後期中等歴史科の両方あるいは片方の学習指導要領で歴史文化について言及している州が増えてきている。学習指導要領において具体的な単元の内容として歴史文化にかかわる事物を取り込んでいる州も少なくない。KMK (各州文部大臣会議) の決議「教員養成における専門学問・教科教授学の内容に関する諸州共通の要求事項」においても、歴史教師となるために修得すべき歴史教授学の内容として、「歴史意識の育成と歴史文化の熟考的な取り扱いの促進」における諸次元、「歴史文化の諸施設や諸形態」などが挙げられている (KMK, 2014: 29)。
- 4) このような3区分は、Reeken (2004: 328-329) を参考にしている。
- 5) この第II章における考察内容は、服部 (2014) に依拠している。
- 6) 2009年の試行版レアプランでは、「種類コンピテンス」とは、「様々な史料種の史料においてや

様々な文献史料類において、また、記述においてや歴史文化の諸形態において、ある歴史的な課題についての各々の説明力を認識し、それを適切に考慮することができる」能力とされ、「解釈コンピテンス」とは、「史料と並び、歴史についての記述（例えば、事典、オンラインの叙述、ジャーナリズム、専門文献）や歴史文化」から「複眼的に歴史的な知識や意味を取りだすことができる」能力とされていた（ST, 2009: 7）。これらは本来は切り離せないものと考えられていた（LISA, 2009:50）。2012年の確定版レアプランでは、これらが一体的なものにとらえられ、「解釈コンピテンス」として一括されている。

7) この教科書のそれぞれの章では、章末のあたりに「歴史文化」という項目を設けており、他の項目とどのように関連づけるかについては個々の教師に判断を委ねている。

主要資料・文献

- Ebeling, Hans / Birkenfeld, Wolfgang u.a., *Die Reise in die Vergangenheit: Sachsen-Anhalt Band 5/6*, Westermann, 2010a.
- Ebeling, Hans / Birkenfeld, Wolfgang u.a., *Die Reise in die Vergangenheit: Sachsen-Anhalt Band 5/6 Schülerarbeitsheft*, Westermann, 2010b.
- KMK(= Die Ständige Konferenz der Kultusminister der Länder in der Bundesrepublik Deutschland), *Ländergemeinsame inhaltliche Anforderungen für die Fachwissenschaften und Fachdidaktiken in der Lehrerbildung, Beschluss der KMK vom 16.10.2008 i.d.F. vom 12.06.2014*, 2014.
- LISA(= Landesinstitut für Schulqualität und Lehrerbildung Sachsen-Anhalt), *Der neue Lehrplan für die Sekundarschule*, Halle, 2009.
- LISA(= Landesinstitut für Schulqualität und Lehrerbildung Sachsen-Anhalt), *Planungsbeispiel zum Lehrplan Sekundarschule Geschichte, Ist Otto der Große ein geeigneter Werbeträger ?, Schuljahrgang 6*, Halle, 2011.
- LISA(= Landesinstitut für Schulqualität und Lehrerbildung Sachsen-Anhalt), *Fachspezifische Rückmeldungen zur Evaluation des Fachlehrplans und der niveaubestimmenden Aufgaben Geschichte*, 30.Juli 2012, Halle, 2012.
- Pandel, Hans-Jürgen, *Geschichtskultur*, in: Mayer,U., Pandel,H.-J., Schneider,G., Schönemann,B.(Hrsg.), *Wörterbuch Geschichtsdidaktik*, Wochenschau Verlag, 2006.
- Pandel, Hans-Jürgen, *Geschichtsdidaktik*, Wochenschau Verlag, 2012.
- Reeken, Dietmar von, *Geschichtskultur im Geschichtsunterricht*, in: *GWU*, 55, 2004.
- ST(= Kultusministerium des Landes Sachsen-Anhalt), *Lehrplan Sekundarschule, Geschichte, Erprobungsfassung: 03.08.09*, Magdeburg, 2009.
- ST(= Kultusministerium des Landes Sachsen-Anhalt), *Fachlehrplan Sekundarschule, Geschichte*, Magdeburg, 2012.
- 角田将士・片上宗二「高等学校地理歴史科「日本史」の単元開発－導入単元「日本史を学ぶ前に」」, 広島大学大学院教育学研究科『学校教育実践学研究』第10号, 2004.
- 服部一秀「年代史的カリキュラムにおいて過去の取り扱いの探究能力を育成する方略－ザクセン・アンハルト州中等学校の2012年版歴史科の場合－」, 日本社会科教育学会『社会科教育研究』No.123, 2014.
- 宮本英征「社会形成をめざす世界史の導入単元の開発研究－単元「言説『帝国』を考える」を通して－」, 日本社会科教育学会『社会科教育研究』No.115, 2012.
- 森才三他「高等学校社会系教科における導入学習に関する授業開発の研究(Ⅱ)－「世界史A」導入単元の場合」, 広島大学学部・附属学校共同研究機構『学部・附属学校共同研究紀要』第36号,

2007.

- ・山名敏弘他「高等学校社会系教科における導入学習に関する授業開発の研究(Ⅳ)－「日本史 B」導入単元の場合」, 広島大学学部・附属学校共同研究機構『学部・附属学校共同研究紀要』第 38 号, 2009.